共同利用の役割 意識せず

1980年代末、日本DNAデータバンク（DDBJ）を擁する国立遺伝学研究所（遺伝研）にゲノム研究の国内拠点を新設する計画があった。最終的に遺伝研側は受け入れを拒否し、DDBJは予算を大幅削減されたという。背景には他大学の動きもあったとも言われるが、89年10月から遺伝研所長を務めた富沢純一も受け入れには否定的だった。

富沢は自らの考えをはっきりと口にし、信念を貫く人柄だった。90年からDDBJの運営を引き継いだ五條堀孝は、所長就任前に聞いた富沢のスピーチを覚えている。86年度の朝日賞贈呈式でのことだった。

その年の賞は、富沢と、遺伝研の集団遺伝学グループを率いる木村資生の2人に贈られた。木村門下の研究者らも列席した。登壇した富沢は「私はこのような場に若い研究者を連れてこない」「若い人は時間があったら仕事をすべきだ」と堂々と述べたという。

ゲノム研究拠点の受け入れ拒否について、富沢に尋ねてみた。「DNA解読のような誰でもできる仕事をやるべきではないと思った。DNAデータはこれから重要になると思ったが、当時の日本には生物学の情報を解析できる人材がいなかった」というのが富沢の見方だった。仮にいたとしても、遺伝研では非実験系の研究者をこれ以上増やせないとも考えていた。

さらに富沢は「共同利用研究所」という遺伝研の役割について「不思議で仕方なかった」とも語った。共同で利用されない研究所などないのだから、共同利用という概念を意識したことはないというのが富沢の立場だった。

（伊東真知子・国立遺伝学研究所特任研究員）

1996年4月、電子計算機棟開所式の富沢純一（右から2人目）＝五條堀孝名誉教授提供